

対話としてのアート： 鑑賞教育から生涯学習の可能性を探る

畔 柳 和 枝
(愛知淑徳大学大学院生)

1. はじめに—対話としてのアート

絵画や彫刻といった美の表現活動であるアートは不可視なものを視覚化することが可能なメディアのひとつであり、社会から遊離した「アートのためのアート（純粹芸術）」と、人生の主要な解釈に役立てる「人生のためのアート」⁽¹⁾という異なる概念を持っている。

本稿は後者の概念のもと、アートを作品と鑑賞者とを結びつける「会話」として捉え、その会話を介して自己や他者、社会と向き合うことで知的発達と人間形成へと導く「対話としてのアート」に着目し、このアートに美術教育の視点からアプローチし開発された対話型鑑賞教育プログラムの事例を通して、対話としてのアートの生涯学習への応用とその可能性についての考察を試みる。

生涯学習という視点から対話としてのアートの有効性を問う時、自己の内的世界の表現を主体的な創作行為の中で行うことで創造性を高めて心身の癒しを得るアート・セラピー（絵画療法）と、受動的な鑑賞行為を通して作品の意味や価値の創出を鑑賞者の意見交流の中に求め、その知の創出の経験を重ねることで知的発達の成長を目指す鑑賞教育との2つの手法をあげるこ

ができる。どちらも美術教育の経験の有無に関わらず、テクニックを求めず、価値基準のない地平からの自己表現行為であり、これは生涯学習に不可欠な要素であると考えられる。しかしアート・セラピーにみられる創造性や感受性などの感性への働きかけのみではアートの視点からは意義ある手法と認識できても、明確な方法論と目的が必要な学校教育での有効性は証明し難い。

一方、本稿で取り上げるビジュアル・シンキング・カリキュラム＝VTC (Housen 1980) の⁽²⁾鑑賞法は、児童の学力と社会的スキルの向上を達成したことで、対話としてのアートが他の学問分野と同等の学習効果を持つことを証明した。さらに VTC の理論を発展させ、美術館や教育施設でのギャラリー・トークを用いた対話による鑑賞法 (Arenas 1998) は幅広い年齢層を対象に考案された点で、対話としてのアートが社会教育の場においても有効性を持つと考えられる。従って上記 2 つの対話型鑑賞教育プログラムの考察を通して、対話としてのアートが①教育という他の社会領域と交わることで個人の潜在的な知的能力を導き出す役割を果たすこと、②対話型鑑賞法を介して生涯学習の場を生成するという証明が可能となる。

現在、鑑賞教育に関する研究は VTC プログラムによる知的発達と美術教育との関係性について (奥本 2007)、アレナスの対話型鑑賞法の方法分析論 (上野 2001)、及び鑑賞教育の知的発達と授業カリキュラムへの応用 (金子 2004) といった学校教育の範囲に留まっているため、未だ②の生涯学習の視点からの考察がなされていないと思われる。⁽³⁾

こうした状況を踏まえ、VTC 及びアレナスの対話型鑑賞法の事例から鑑賞教育の教育的意義について分析し、さらに対話型鑑賞法の日本での実践データ、筆者による美術館のギャラリー・トークの参加体験、鑑賞教育に関する先の研究成果などの総合的視点から、鑑賞教育の生涯学習としての可能性を考察すると共に、その背景にある「対話としてのアート」にみる現代社会に相応しい人間とアートとの関係を提示していきたい。それは創作表現中心のアートの研究領域においても、作品の意味や価値についてさまざまな角度から思考し、創出し、それを意見交流の場において言語表現する鑑賞教育を受身的な行為ではなく創作的行為と捉えることで、芸術表現に対する学術的理論の幅を広げるものと思われる。

2. 対話としてのアートの教育的意義 －VTC の鑑賞教育プログラム

アートは鑑賞行為を通して成り立っている。鑑賞とは作品を見てその美的価値を享受することであり、そこに創造されたものとパトスとを共有することである。また作品を制作した作者を理解する行為、あるいは通常は知られることのない制作工程の内実について、作品と作者を理解することによって知ろうとする行為でもある。鑑賞という行為の重要性は鑑賞者が作品を見出すことにあると同時にアートの存在を成立させていることにあるが、多くの鑑賞者は専門的な情報を持たずに作品に接する。専門的知識を持って鑑賞する行為は作品を知る、理解するという知的行為であって、共感し感動するという行為とは異なるが、共感の前提としてそれらの知的行為があることで鑑賞をより豊かなものにする可能性は高い。しかし鑑賞という行為が直接的に鑑賞教育へと繋がるわけではない。なぜなら不特定多数の人間が共有し享受できるのは感性的なものではなく、作品を通して語られる文化や思想といった世界観からである。鑑賞行為を通して教養を深めることを教育と捉える時、そこに対話としてのアートの確固たる意義を見出すことができる。

民主主義の思想を社会の基盤とするアメリカでは美術館は単なる教育の場ではなく、人々の生活や社会が実際に直面する問題に密接な関わりと役割を持ち、人々が既に持っている知識、思考、感情に変化を及ぼし、問題提起を行い、価値観を揺さぶるような公共施設であると考えられている。⁽⁴⁾

1980年代マサチューセッツ大学の認知心理学者ハウゼンとニューヨーク近代美術館（通称 MOMA）教育普及部のヤノワインによるビジュアル・シンキング・カリキュラム（Visual Thinking Curriculum）は、他者や自己との対話を通して美術作品を理解し、鑑賞行為が広い意味での教育や人間形成に役立つという仮説のもと、学校教育で実践されることを前提に作られた鑑賞教育プログラムである。VTC は児童の創造的思考力、コミュニケーション技能、イメージの読解能力の育成の実現と美術教育に留まらない教育全般への応用を目的とし、ニューヨークの公立小学校の教師75名と児童3500名（4年生から6年生）を対象に、1991年から5年間に渡り実践し体系化された。それはハウゼンの研究成果⁽⁵⁾を基に分類された3つのグループ（①VTC を全く受け

ないグループ、②3年間を通して学級担任から VTC を受けるグループ、③3年間を通して MOMA の教育者から VTC を受けるグループ)の比較により、学校教育における美術教育の有効性と子どもの成長に与える対話型鑑賞教育の効果を証明する研究となった。

VTC の授業は講義ではなく、毎回 5 ～ 8 枚程度の絵画や彫刻などの造形作品のスライドを見ながら行うグループ・ディスカッション形式の鑑賞法である。教師は「この絵画には何が見える?」、「どんな印象を持つ?」といった確定した唯一の答えを求めないオープン・エンド形式の質問を繰り返し、さらに作品に反応する生徒達の表現方法や感想をもとに、そう感じた理由や根拠を作品の中に見つけ出すための質問を重ね、時には生徒が互いに問題提起をし、発言し合う。VTC はこのような鑑賞行為をもとに、教師やグループとの対話を通して五感をフルに活用させる謎解きゲームのような授業体験を重ねることで、生徒自身が自己の新たな発見や共同体の中で思考する訓練を積むことや、他人の意見を聞くことやそれに基づいた自分の意見を述べることで、その理由を理論的に思考する力といった児童の知的成長を目指したのである。

プロジェクトの成果をグループごとに比較した結果、VTC を全く受けていない生徒のグループには殆ど変化が見られなかったものの、VTC を3年間学級担任から受けたグループは全体で最もアート鑑賞レベルのステージが向上した。それと同時に勉強の出来不出来に関わらず、9歳から12歳くらいの子どもの美的な認識力、認知能力には大して個人差がないということも判明した。⁽⁶⁾ このデータから年齢や学力に関わらず人間

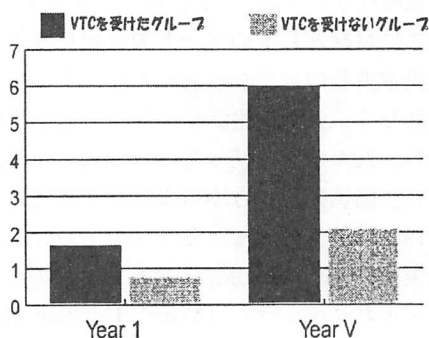


図1 観察力テストのスコアの違い
Housen, A. "A Ethetic Thought, Critical Thinking and Transfer" in AUE, <http://www.vue.org/>, 10 April 2007.

の脳は物事を描写し討論することで普段は使わない言葉を思い起こし、使うようになることで文章力や読解力が向上することが証明されたのである。ま

た3つのグループのうち①のグループに比べ、②と③のグループの鑑賞レベルが向上したのは彼らが作品を理解し、それをもっと豊富な言葉で表現することに関心を抱いた現われである。そして②と③のグループの生徒たちに最も大きな進歩が見られたのは観察力の面であり、算数の授業では小数点をよく見落とす①のグループに比べて②と③のグループはミスが非常に少ないという結果が出た。また②と③のグループは国語の授業で、ひとつの言葉から連想する類似語を①のグループ以上に多く思いつくなどの成長の差がみられた。⁽⁷⁾

以上のように、VTCは鑑賞教育（見る、考える、表現する行為を重要視する）が学校教育カリキュラムとして有効であることを示したとともに、「対話としてのアート」が自己表現をすることや他人に認めてもらうという、目標を達成するために必要な知的発達に影響力を持つことを提示したのである。

3. 生涯学習と対話としてのアートーアレナスの対話による鑑賞

劇作家の平田オリザが自らの著書の⁽⁸⁾中で論証しているように、今後アートへのアプローチが教育や文化政策に新たなヴィジョンを加える可能性は高い。なぜなら個人の異なる価値観を大切にする成熟社会へと移行している現代社会では、創造性を育てることの重要性はますます高まり、異なった価値観を統合ではなく融合する知恵や経験が重要視されていくからである。

対話としてのアートを学校教育の枠を超え、社会教育というより広い視野からみたアレナスの「対話による鑑賞」は、作品を介した鑑賞者とのさまざまな意見交流と交錯の中で自らのアイデンティティを変位逸脱し、それを再編する学習の試みである。アレナスは1984年から96年まで MOMA の教育部に在職し、VTC の開発に携わった経験を持つ。対話による鑑賞とは時間をかけて「見る、考える、話す」というシンプルな行為を繰り返し、アートをコミュニケーションの発動装置として捉えた、VTC を発展させた彼女独自の対話型鑑賞法である。その特色のひとつは、美術史の知識を必要とせず、対話のプロセスが生み出す鑑賞者の自由な発想を重視している点である。専門的知識を持って鑑賞する行為は作品を理解するための知的行為であり、共鳴し

感動することは感性との関わりある。アートは知的理解とは関係なく感動する場合もあるため、専門的な情報の有無と関わりのない鑑賞も存在するのである。そのため、対話による鑑賞法では作品と向き合う時間を多く取り（最低でも1時間以上）、自分の目で見て思考し、自分の言葉で作品を語ることを何よりも重要視しているのである。

ふたつ目の特色はアートとは作品と鑑賞者とを結ぶコミュニケーションであり、作品は新鮮な感動や新たな視点を鑑賞者の中に生じるきっかけであるという鑑賞理念である。対話による鑑賞の理念は、さまざまな感情や意見を他者と共有し論議し、その相互から発生するものの中で作品の意味や価値が生まれ、新たなアートの概念を創出することである。このような鑑賞法が生涯各期に渡る学習として有効な点は、体系化された方法論や教材などを用いないことで鑑賞者の性別や年齢、環境等に影響されることなく自己の創造力を養う機会を提供することである。対話による鑑賞では作品の意味や価値は鑑賞者との対話の中で即興的に生まれるので、その中心は鑑賞者であり、決められた規則やあらかじめ用意された回答は存在していない。

このように学習者自身が具体的かつ経験的な知の創出の場に身を置くことや、その経験を積み重ねることは、既成の価値基準や概念あるいは自己を取り巻く社会全体を捉え直す経験の場を準備することや、自ら学び自ら考える知的成長を助長する有効な手段となる。それは同時に鑑賞教育の社会的価値と対話としてのアートの重要性を証明することでもある。それを示唆するように現在の美術教育では個性や創造性の伸長、生涯に渡るアートへの関心と育成が求められる傾向にある。中央教育生涯学習審議会答申（1999年6月）は、さまざまな体験の機会を意図的、計画的に提供していくことにより子どもたちに「生きる力」を育んでいくことの重要性を指摘している。⁹⁾ この中で美術教育に期待されることとは、作品を自分の見方でみて、触って、考えるという能動的な学習による「生きる力」を育てるという新たな教育観念の創造である。対話による鑑賞は教師や専門家の知識や技術を一方的に与えるのではなく、子供たちや市民と対等の眼差しで作品と接する喜びの共有が基本となっている。鑑賞行為を通して共感し支援するという教育観は学校、家庭、地域社会が相互に連携して社会全体で育んでいくものであり、生涯学習推進にも「生きる力」の育成を視野に入れた教育プログラムの創出が求められて

いる。この点からも対話による鑑賞はその実践的メソッドであると共に、能動的学習体験の支援機能を持った理想的なモデルと考えられるだろう。

アレナスは対話による鑑賞を日本に紹介するとともに、1995年からゲスト・キュレーターとして各地方の美術館においてセミナーや講演を行い、教師、学生、会社員、主婦、フリーター、研究者、NPO 関係者といった様々な職業や幅広い年齢層（10代～60代まで）を対象にデモンストレーションを実施している。1998年7月から翌年3月まで豊田市美術館、川村記念美術館、水戸芸術現代美術セン

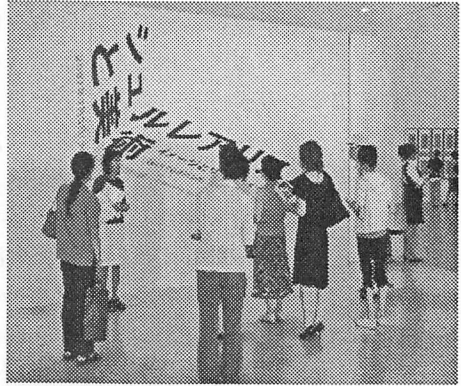


図2 豊田市美術館ギャラリー・トーク
「シュルレアリスムと美術」展
豊田市美術館2007年8月28日

ターで開催された「なぜ、これがアートなの？」展はアレナスと共同の企画により実現した、アートの知識にとらわれずに自分自身の目で作品を読み解くことの楽しさや意味を鑑賞者自身が見出すことを目的とした展覧会である。この展覧会の実験的試みとは20世紀の現代アートの作品タイトル（計40点）と作家の名前を記したキャプションを掲示しないで、実際に作品を見て感じる色彩や形体からのイメージによる5つのセクション分けで展示したことと、さまざまな教育プログラムが試みられたことであり、そのプログラムのひとつが美術館のボランティア・ガイドによる対話型ギャラリー・トークの実践である。

ギャラリー・トークと呼ばれる作品の解説活動は来館者個々の年齢や興味、関心事に応じた鑑賞を支援するための活動で、今日の日本の美術館では展示事業に関連して行われる重要な教育プログラムとして定着しつつある。しかしギャラリー・トークの方法論や鑑賞者への教育的配慮、具体的なテクニックに関しては、未だ深く論議されていないのが現状である。アレナスの対話による鑑賞の目的は、鑑賞者が主体的に作品と対峙することで自分なりの解釈を行っていくという鑑賞行為の醍醐味を実際に体験することにある。展覧

会の開催にあたり、3つの美術館はアレナスを講師に招いてボランティア・ガイドを養成するギャラリー・トークの合同研修を開催し、対話による鑑賞の基本的なノウハウについて学ぶ機会を作った。

ボランティア・ガイドは質や内容ともに適切な作品を選定し、トークの流れを作るファシリテータ（対話の進行役）としての役割を担う中心的存在である。ファシリテータに必要な要素について豊田市美術館学芸員の都築正敏は、作品選定の重要性、パフォーマンス力、鑑賞者の意見を総括する技術力をあげ、個々の個性を活かしながら対話を展開することの重要性をあげている。⁽¹⁰⁾ ファシリテータに体系化された方法論は存在しないが、対話による鑑賞では何よりもトークを知識の創出の場と捉え、鑑賞者の一人ひとりをその創出の場に居合わせるための発想が必要である。ファシリテータはそのトークの核となる簡単な基本質問「これは何?」、「何が起きているの?」、「どうしてそう思うの?」、「何を見てそう思ったの?」を通して鑑賞者に読みの過程を意欲づけ、その回答を自分の言葉で表現できるように支援し、他者の意見を交えながら対話を促進する役割を果たしているのである。

アレナスは作品の意味は人々が鑑賞行為を通して行われる作品とのコミュニケーションの中で付加されるものであり、そのためには視覚的な観察力を育てることが重要であると考えている。注意深い観察による発見と判断、思考から、表現という過程に働くさまざまな力の人々との対話を通して育てることが対話による鑑賞のねらいであり、それは先に述べた自ら学び自ら考える力すなわち「生きる力」の育成とも共通した理念を持つと考えられる。

豊田市美術館の対話型ギャラリー・トークは展覧会オープン翌週から閉幕までの毎日1回、約1時間のスケジュールで行われ、参加者人数は1回で平均5人（平日）、週末は10人程度であった。⁽¹¹⁾ 展覧会終了後のアンケート報告⁽¹²⁾では参加者の92パーセントが「今後もプログラムに参加したい」と回答しており、対話による鑑賞が市民に大きなインパクトを与え、より開かれた美術館になるための機会を提供したことが予想できる。例えば参加者の意見の中で特に多かったのは①「作品をじっくり見るといろいろな発見がある」、②「人それぞれに見方、感じ方が違うことがわかった」、③「自分自身で作品を読み解いていく楽しさを知った」という3つの意見である。

①の意見は時間をかけて作品を見るという態度から導き出されたものであ

り、対話による鑑賞が参加者に個々の作品とじっくり対峙し、主体的に注意深く観察することの重要性を伝えるきっかけとなったことが認識できる。②の意見は他人の意見を聞くことで、年齢や生活環境も異なる人たちの考え方や価値観の違いを知る機会となったことを表わしたものと考えられる。対話による鑑賞を通して自分とは異なった作品の見方や感じ方を学ぶことは、他者を理解し受容することに繋がる行為といえる。このように多くの人々と共に作品を読み解く体験が、他のさまざまな学習領域へと広がっていくことも対話型ギャラリー・トークの大きな特徴のひとつであり、多様な意見交流を通じて作品は新たな意味が付加されていくのである。そして③の意見はギャラリー・トークの中で自分の視点から捉えた作品解釈が他者の共感を呼び、自分が人に認められていると感じた鑑賞者や、作品の新たな解釈の仕方や作品の意味を付加させることの重要性を認識した鑑賞者の反応が反映された意見と考えられる。

以上の結果は、対話型ギャラリー・トークの意義を確認するうえで非常に重要な点と考えられる。なぜなら対話による鑑賞は現代アートに対するこれまでの先入観（現代アートは知識や情報がないと理解できない）を覆し、通念的な美術教育の方法（作品の中に作家が込めたコンセプトをただ読み取ればよい）を否定する立場を取ることを意味するからである。

さらに2004年11月から翌年1月まで5つの地域（京都、大阪、滋賀、兵庫、奈良）を対象に京都造形芸術大学のアート・プロデュース学科が行った「対話による鑑賞プログラム」の調査報告⁽¹³⁾と比較しても、豊田市美術館の事例と同様に参加者の大半が対話型鑑賞法に肯定的反応を示している。ここでの参加者の最も多かった「作品への見方が広がった」という意見と、次に多い「作品に向き合う姿勢に変化が生じた」という意見は美術館のギャラリー・トークの①の意見に対応し、その他「人の意見を聞くことは楽しい」という意見は②に、「コミュニケーションしながら見ることに変化を覚えた」、「自分の価値観で見ることの喜びを感じた」という意見は③と対応関係にある。

豊田市美術館では展覧会終了後もボランティア・ガイドによるギャラリー・トークを継続している。現在開催中の「シュルレアリスムと美術」展では週に5日、展示作品8点の絵画を対象に、1時間程行われている（1日の参加者平均10人）。ギャラリー・トークの終了後、「ひとりで見ていたら作

品の意味を見過ごしていた」という参加者の言葉が印象的であった。こうした日本での実践例と鑑賞者への影響力は、対話による鑑賞法が生涯学習の方法として、社会的要請に十分に応えられる要素を持つことを示している。

4. 対話による鑑賞法から生涯学習の可能性を探る

以上に行った考察から、鑑賞教育は観察力と判断力、それを考えにまとめる力、そしてその考えを言葉に駆使する表現力、さらには対話を通して多様な価値観の認知力の発達に影響力を持つことが認識できる。これは鑑賞教育が人間の創造性や個性、想像力、感受性という漠然とした効果を語るのではなく、鑑賞者に新たな（そして公平な）知的競争の場で自らの能力に磨きをかける機会を提供することの証明でもある。普段我々が使用する言葉の種類は、知っている語彙のわずか10パーセントから15パーセントに満たないと言われている。⁽¹⁴⁾これは現代社会において人々が物事を丹念に描写し、それについて他の人と意見交換する機会を持たなくなったことに起因している。このような社会背景からも、対話による鑑賞法が知的形成を目的とする生涯学習として有効性を持つことが考えられる。

また、誰もが年齢や性別、人生のバックボーンに関係なく参加できる点も生涯学習として欠かせない要素である。対話による鑑賞は生い立ちや生活環境、世代の違いによって鑑賞者の関心や興味を狭めてしまう音楽とは違い、多様な背景を持った人々が、互いに感じたことを独自の言葉で表現し合っていく中で作品の意味を作り出していくものである。生涯学習とは知的成長を意図するだけでなく、学びの活動を通して自己の存在を確認し、自己効力感を高め、他者を受容する正しい判断力と価値観の創出といった人間的な充実や成長を目指すものでもある。

アレナスの対話型ギャラリー・トークでは様々な時代やジャンルの作品が扱われており、世界的な名画といわれる作品もその対象の一部である。『最後の晩餐（1498）』や『モナリザ（1503-6）』をテーマにしたギャラリー・トークによって彼女の鑑賞法は広く知られることになった。このような名画といわれる作品は現代社会においてシンボルと化し、視覚像が象徴化され知識と

して蓄積されているがゆえに、鑑賞の有無に関わらず作品を認識することができる。しかしそれは本物を前にしながらも、自分の知識や情報と照合し確認しているにすぎない。作品の評価や価値や意味という知識的なものは社会や時代の影響を受けて絶えず変容するものであり、鑑賞には自分の目で見て思考し、それを自分の言葉で表現するという経験が何よりも重要なのである。それは鑑賞者中心の芸術理解、芸術体験を目指すアレナスの基礎理念と共通することでもある。このような対話による鑑賞のアートに対する眼差しを、社会や時代が作り上げた概念や価値観に対する我々の判断力や価値基準の創出に向けることは意義あることと考える。対話による鑑賞は人々が場所と時間を共有しながら知的成長をサポートする、安全で支持的な環境を提供する。こうした環境の中で様々な作品を媒体として自己表現することは、鑑賞者に新鮮で開放的な感覚を呼び起こす機会を作り、初心に戻る大切さを発見し、その経験の感動を日常生活において維持することで、成功や達成という社会に必要とされている知識や価値観をいかに手放すかということを学ぶことに繋がる。それは生涯学習支援の役割のひとつであると考ええる。

対話による鑑賞における学習意義とその有効性についてファシリテータの視点から問う時、言語コミュニケーション能力の向上をあげることができる。「なぜ、これがアートなの？」展に参加した3つの美術館のボランティア・ガイドたちの意見は、今後も継続的に対話型ギャラリー・トークを続けていくことに一致しており、これは対話による鑑賞がファシリテータの側にも何らかの影響を与えたことを表した結果である。この点について豊田市美術館の都築は、ファシリテータ役のボランティア・メンバーに思考力の柔軟性と言語表現力の豊かさという変化が見られたことを指摘している。⁽¹⁵⁾ その変化の最も大きな根拠のひとつは、美術館に訪れる多様な一般市民のニーズに応じて実践してきた対話型ギャラリー・トークの活動にあると考えられる。アレナスはこうした対話による鑑賞体験を積み重ねることの有効性について、言葉にできないアートを言葉で表現するという矛盾の作業の難しさと、ゆえに鑑賞することが受身的な行為ではなく創作的な行為であることを論じている。このような対話を通して鑑賞者の関心と疑問をくみ上げながら作品を実際に見ることを積み重ねていく行為は、無意識のうちにファシリテータ自身の中に大きな変化をもたらしたのである。

個人主義が目立つ現代社会では、メディアやインターネットの普及により直接的な意思の伝達や疎通を取るために努力することや、創造的思考を働かせる機会や環境に恵まれていないのが現状である。ゆえに自己表現不足や他者の意見を受け止める柔軟性の欠如が起因となる人間関係のトラブルや、疎外感と孤独を抱えて精神的に苦しむ人も多く存在している。対話による鑑賞はアートを媒体とした自己発見により他者と結びつき、地域社会や世界との関わりを促進するための訓練の場を提供する。ファシリテータを含めた鑑賞者は他者とのコミュニケーションを重ねることで、アートに限らず周りの環境や社会を新たに捉え直し、様々な見解や解釈を学び、社会や文化に対する見聞を深めることができる。そうした経験を実生活においても自然に応用していくことはアートの世界のみならず、人間の根源的な力を開いていくうえで重要な糧となる。こうした知的側面と感性的側面との総合作用が生涯学習の要素として不可欠であると捉える時、アレナスの対話による鑑賞は、この両側面に及んでいると考えられる。

近年、子供たちの創造性の育成や高齢化社会におけるシニア世代の自己啓発や老年期痴呆を防止するワークの有効な手段として、アート・セラピー（絵画療法）が医療機関や福祉施設、市民講座のプログラムなどで取り入れられている。これは人間の営為における創作活動の意義と、アートに対する社会教育としての有効性が一般的に認知された表れでもある。心理学者のロジャースはアート・セラピストが目指すべきカウンセリングの基礎について、①クライアント中心であること、②クライアントの発言をよく聞き、どのように感じ、どのように生きつつあるのかの理解に努めること、③クライアントが自ら気づき、成長していくことを可能にするための雰囲気を作ることを指摘する。⁽¹⁶⁾ この3つの基礎の背後にあるものはクライアントの意思に共感的理解を示すという「受容」であり、これは鑑賞者中心の芸術理解、芸術体験を目指す対話による鑑賞の基礎理念①受容（鑑賞者の意見を受け入れる）、②交流（鑑賞者相互の意見を組織化する）、③統合（鑑賞者の意見の向上的変容を促す）と共通項を持っている。

アート・セラピーや対話による鑑賞法が多くの人々の心身に効果的に働きかけるのは美術教育の有無に関わらず、自己の内的世界と直接に対話し表現できる安全な時間と空間を提供するからである。創作行為とそれについて考

えることは別の作業ではあるが、人間は自分が生きている時代や文化的影響から隔離されて作品を作ること、語ることはできない。作品を語ることは自己表現をすることに等しい行為である。その背景にある対話としてのアートは様々な常識や制約にとらわれ、心身のバランスを保つための場所を持たない我々にとって、一種のサンクチュアリ的な役割を担う。対話による鑑賞法を実践している美術館（少数ではあるが）では、アート鑑賞の楽しみ方を知りたいと考えている成人を対象に、ギャラリー・トークを中心とした講座が開催されている。参加者一人ひとりが作品をめぐる対話に参加し、個々の意見を自由に交流し合い、意味や価値の創出を担う参加体験型の対話による鑑賞は今後、生涯学習としての新たな可能性と成果が期待できる。まさに、現代社会における人とアートとの新たな関係を提示しているのである。

5. むすびー現代社会のアート

我々は自分なりの哲学や思考を獲得するために一定の文化や理想を学び、世界観を広げ、それを実生活の中で応用して創造的な自我を確立することが必要である。そのためには知識だけでなく発想が必要であり、鑑賞教育は複雑で繊細、逆説に満ちたアートという文化世界を理解する視点の変化が求められる。こうした学習機会を通して人間の感性は磨かれていくのである。

VTC やアレナスの対話型鑑賞法は、従来の美術教育が抑圧していた、より根源的な感覚や表現力を生徒自らが見出し、開花へと促す「脱芸術」的喜びの実践でもある。その試みは教育という社会領域や、時にはアートという枠組みからも脱し、他の人々と交錯することで新しく創出する安全で平和な環境を提供する場として捉えることができる。このように対話としてのアートは社会や人間との関わりの中に存在している。作品を媒体とした他者との交流の中で共有や協働という体験を重要視することは、開かれた他者や社会との関係から遊離する傾向にある自らの生活や人間関係のあり方に、現実性を取り戻す重要な要因として受け止められるだろう。それは今後の生涯学習の可能性と目指すべき方向性であると考ええる。

<注記>

- (1) 1940年代に「アートは人の役に立つ」という思想のもと、戦後の実存主義哲学を背景とした米国の芸術運動抽象表現主義の活動から生まれた概念。
- (2) VTC 研究：Housen, A. & Yenawine, P. “MOMA Research and Evaluation Study: school programs” in *Visual Understanding in Education*. 及び “MOMA School Program Evaluation Study Report II” in *Visual Understanding in Education*, <http://www.vue.org/>, 10 April 2007.
対話型鑑賞法の研究：アメリア・アレナス『なぜ、これがアートなの?』（福のり子訳）淡交社, 1998年。同著者『みる・かんがえる・はなす』（木下哲夫訳）淡交社, 2001年。『なぜ、これがアートなの?』（福のり子訳）淡交社, 1998年。
- (3) 奥本素子「美術鑑賞と美術教育は違う」, Web AE 誌芸術と教育9号, <http://www.art.hyogo-u.ac.jp>, 2007年4月3日参照。上野行一『まなざしの共有』淡交社, 2001年。及び「子供はモナリザをどうみるか（まなざし方式の現在）」, 美術科教育学会通信 No.45, 東京学芸大学2002年6月3日発行, 3頁。金子一夫「美術の方法論の理解を目的とする鑑賞教育（1〜7）」『茨城大学教育学部紀要（人文, 社会, 芸術）第44, 46, 53号』, 1995, 1997, 2005年。Tishman, S. “MoMAs’ Visual Thinking Curriculum” in the Project Zero web site of the Harvard Graduate School of Education, <http://pz.harvard.edu/Research/MOMA/htm>, 10 April 2007参照。及び Project Zero. *Art works for Schools*. DeCordova Museum and Sculpture Park, 2000.
- (4) 欧米の美術館のミッション・ステイトメントには、美術館の教育的、文化的、社会的な役割についての記述が必ず記載されている。Mayers, F. *ABC: National museum of American History*. Harry Abrams. Ltd, 1989 p,231.
- (5) ハウゼンは1970年代から約2000人を対象に鑑賞者に関する調査を行い、その結果をもとに鑑賞能力のレベルを5段階のステージに分類した。
- (6) Housen, A., op.cit., 117.
- (7) Housen, A., (Report II) op.cit., 103.
- (8) 平田オリザ『芸術立国論』集英社, 2001年, 214頁。
- (9) 文部科学省ホームページ, <http://www.mext.go.jp/>, 2007年4月14日参照。
- (10) (11) (12) 豊田市美術館での調査結果から。(2007年7月14日)
「なぜ、これがアートなの」展調査報告書（豊田市美術館1998年7月21-9月23日）
- (13) 京都造形芸術大学「対話による鑑賞」講座（2004）の参加者（学生と市民ボランティア）アンケート結果を参照。「もうひとつの鑑賞」, エイブルアート・ジャパン, <http://www.ableart.org>, 2007年4月14日参照。

- (14) 上野, 前掲書. 33頁。
- (15) 豊田市美術館での調査結果。
- (16) カール・ロジャース『人間の潜在能力ー個人尊重のアプローチ』(畠瀬稔訳), 大阪創元社, 1984年, 26頁。